

● 制作

築地に醸す —埋立地の液状化履歴に基づく有機的な道の提案—

安藤 陽菜 園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム（主指導教員：霜田 亮祐）
ANDO Haruna

1. 研究の背景と目的

千葉市美浜区は埋立地であり、千葉市の人口と財政を支える意義深い土地である反面、合理的で画一的な構造のために古くから存在する低地との繋がりは希薄である。造成された1960年代から約60年が経過した現在、美浜区の多くを占める団地で老朽化と人口減少が起きている。本研究では、そのような対象地において、低地と地理的・社会的連続性のある、人口減少時代に適した埋立地のあり方を模索する。

2. 調査

対象の埋立地では団地と戸建てがともに広域を占め、地域活動の拠点になりうる都市公園が少なく、近年の開発は埋立時に造成された新たな海岸部に偏っている。稲毛海岸駅周辺には、買い物のしやすさと交通の便の良さを魅力とし、海岸地域のリゾート性を組み込んだ戸建て住宅群が建設された。この埋立地は区外への通勤・通学のための重要な居住地域であり、地盤改良によって建物自体は安定しているが、東北地方太平洋沖地震の際には道路や駐車場などの宅地との境界で大きな液状化が報告された。

敷地周辺の低地には、浅間神社や「御浜下り」という祭りなどのかつての海辺文化に加え、YohaSやHELLO GARDENに見られるような新たな文化的活動が存在する。低地と埋立地の境界には千葉市沿岸部を観光地として支え、現在は遷移した旧松林の斜面林が、新たな海岸部にはそれを模した松林が存在し、時間を感じさせる風景になっている。

3. 対象地

千葉市美浜区幸町2丁目の千葉幸町団地は、低地と埋立地の間に位置し、約53haの敷地に5800戸が南面の平行配置で建てられている。海側は千葉港であり運送や食品関係の建物が集中している。西千葉駅、稲毛海岸駅、千葉駅、千葉みなと駅などの主要駅に囲まれ、どの駅からも中心部までは直線距離約2km以内であるが、千葉市の数多くある空洞化が予測されている地域のうちのひとつである。築50年以上経過しており、近年リノベーションされたが、直接的な住環境への対応が多いため今後の地域・千葉市の埋立地のあり方が定まりにくいと考える。しかしながら、団地内には快適さを考慮して設計された曲線的な歩道が存在し、周辺には少ない騒音の少ない緑豊かなオープンスペースとしての価値は高く、転換期を迎える千葉市の埋立地の歴史が刻まれた緑地として活

用できる。また、団地内の道を中心に液状化の被害が報告されているため、これらを重ね合わせることで地理的・歴史的な空間を提案できるのではないかと考える。

4. 提案

以上を踏まえ、団地内の緑道とその周辺の校庭を含むオープンスペースを活用し、液状化の履歴・埋立地の地質を感じられ、道という性質を活かした空洞化とともにまちの骨格に順応しうる提案を行う。

提案の内容を以下に示す。

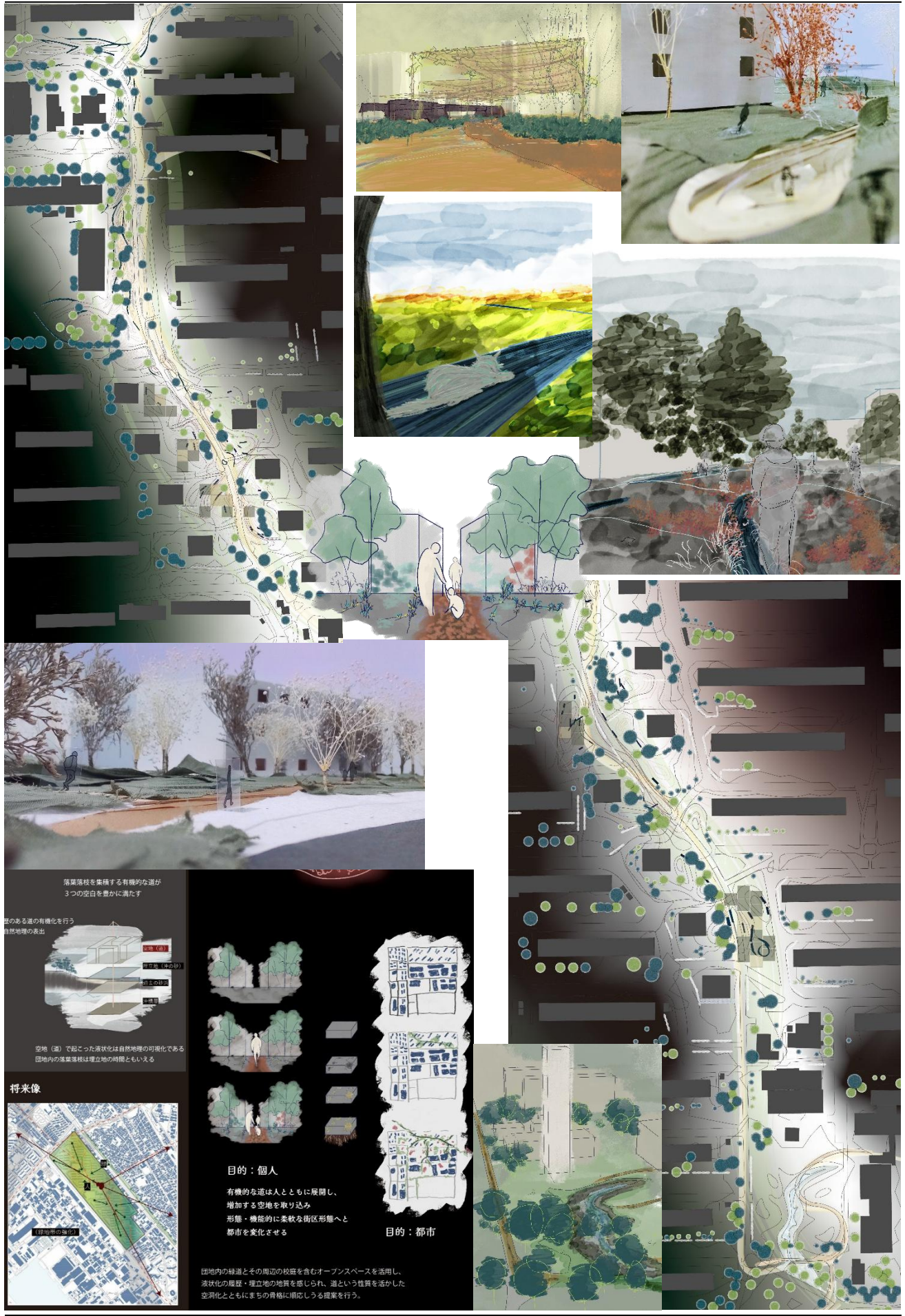
液状化履歴をもとに幸町団地内のおおらかな形状の道を選定し、その舗装を剥がすとともに道沿いになだらかな起伏をつけ、道上に団地内と斜面林で発生する落葉・落枝を集め、土壌生産を行う。道を歩く人々は落葉落枝の物理的な分解という土壌生産のプロセスに参加し、埋立地上に次の地層を重ね、日常的に液状化と地盤特性が結びついた状態を目にすることで自然地理に即した土地のあり方を思い出す。自然環境に左右される生きた道に憩い、道の管理を通じて発生する新たなコミュニティは、道のあり方に関わるうちにいつしか都市計画への参加に発展する。

短期間で画一的に計画された無機的な環境である埋立地に有機的な道を挿入することで、埋立地と低地の地理的・歴史的な文脈のギャップを解消し、衰退化する地域に多様な人と生物を集め、従来の埋立地の開発とは異なる穏やかで内発的な発展を促す基盤を作る。

参考文献

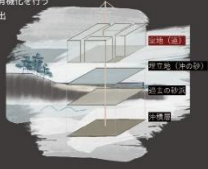
東京の自然史 貝塚爽平著

分解の哲学 一腐敗と発酵をめぐる思考 藤原辰史著



落葉落枝を集積する有機的な道が
3つの空白を豊かに満たす

目的のある道の有機化を行う
自然地理の表出



空地 (緑) で起こった液状化は自然地理の可視化である
団地内の落葉落枝は埋立地の時間ともいえる

将来像



目的：個人

有機的な道は人とともに展開し、
増加する空地を取り込み
形態・機能的に柔軟な街区形態へと
都市を変化させる

目的：都市

団地内の緑道とその周辺の校庭を含むオープンスペースを活用し、
液状化の層壁・埋立地の地質を感られ、道という性質を活かした
空洞化とともにまちの骨格に順応しうる提案を行う。